
いつか同じ空の下

斉賀むつみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつか同じ空の下

【Nコード】

N4777R

【作者名】

斉賀むつみ

【あらすじ】

OLの中崎真乃は週に一度、こっそり副業を営んでいた。その副業とは、異世界からの来訪者に理科・科学を教えること。ふたつの世界を行き来するうちに、異世界が真乃の意識を変え、真乃が異世界の意識を変えてゆく。

大人の異世界トリップ旅行記。

第一話 金曜夜の来客は

「あんた最近、メイク贅沢になったよね」

月イチでやってる女子会（と言う名の飲み会、愚痴り会）。その席でぼつりと友達に言われて、ギクツとした。

「えー………そ、そう？」

「そう。そのアイメイクの変わりようは裏技ごときじゃ出せないでしょ。何、もう春の春色？」

そう言つて友達は某ブランドの名前を挙げる。彼女本人が買ったわけでもないのに、すっかりチェックされているとは恐れ入る。

「そりゃ、気になってるものはチェック入れるの当たり前でしょ。

あたしは値段で迷つてたけど……そっか、買ったかー」

かぶらないようにするけど、あとで使わせてね、と笑う。ちゃっかりしてるなあ。

「衝動買い？それとも色気のある話？」

うわ、降ってきた。後者の流れは避けたいぞ……って思つてたら、周りの子たちから思わぬ援護射撃が飛んできた。

「あれ、この前バッグも買ったよね？」

「買ってた買ってた。新作だったー！この前わたし駅でミュウミュウだーって叫んじやったよ、出会いがしらに」

「はずかしいやつめー！」

「先月レーシックもしてなかった？」

くそう。いざというときとても頼りになるのは友達だと思つんだけど、それでも女友達ってみんな目ざといからあなどれない。

ちよつと贅沢、じゃなくてちゃんと貯金に回さないと。危ない危ない。

「……………えと、内緒にしてくれる？」

『うんうん』

声をひそめると、みんなずいといと身を乗り出した。こわいよ。

「その、後輩の付き合いで前に株を買ってね。それがたまたま当たって、臨時収入が出た……からなんだけど」

答えたとたん、全員がくつと脱力して座席にもたれこんだ。なにこの反応。

「なんだー」

「金持ちの彼氏でもできたのかと思ったのにー」

「はあ？」

そうよいいでしょうーとか言えない自分がささやかに悲しい。いや、今はその話じゃなくて。

（とりあえず、ごまかせたつばい……かな？）

だって本当のことを言えるわけがない。言える方がずっと気が楽なのは確かだけど。

どうにか友達の追求をかわして、家路につく。ひとり暮らしのドアを開けると、電気がついていた。

やば、ちよつと遅くなったかな？

「ただいまー」

ブーツを放り出しながら中に向かって声をかけると、栗色の髪に優しいような眼をした青年があらわれた。

髪の色によく似合うオリーブグリーンのロングチュニックに、ダークブラウンのズボン、といういでたちだ。ロングチュニックには金に近い黄褐色の糸できれいな縫いとりがされていて、たまにまじまじと見とれてしまう。つくづく、うちの玄関にそぐわない服装だなあと何度か考えたけど、回数を重ねれば見慣れてしまうから不思議だ。

「お帰りなさい、眞乃さん。お邪魔しています」

「こんばんは、フェル」

フェルは正しくはフェルディナンドという。長いので、略して呼ばせてもらってる。名前から察せられるとおり、日本人じゃない。

フェルはリア・ファルという国の出身。

それはどこか。聞かれても、あたしにもわからない。なにせ、世界地図でもGPS衛星でも見つけれない。地球上に存在しないのか、現代に存在しないのかはよくわからないけど……とにかく、そういう国のひとだ。

ではなぜそんな国の出身のフェルがあたしの家にいるのかというと、そしてそもそもあたしがフェルと知り合いなのかというと、それにはいろいろ訳がある。

「ごめんねー遅くなっちゃった。待ってた？」

慌ただしくラフな格好に着替えて、リビングに戻ってきた。

「いえいえ、大丈夫ですよ。それより眞乃さん、宿題でわからないところがあつたのですが……」

「お、気になつてるね」

じゃあ今日はまずその解説と前回のおさらいから入ろうか。ポットに紅茶を淹れながら、あたしは本日のカリキュラムをざっと提案した。

「ちつがーう！いまここで見たいのは『ある時間t』の波形なの、それとも『ある座標x』の時間による上下変動なの？」

「……え？」

フェルのいる世界は、科学技術の発展に乏しい。想像するに、中世ヨーロッパぐらいの感じなのかな。

少しの錬金術と、少しの魔法があつて（あたしからすればそっちの方が不思議というか疑問なんだけど）、それでみんなどうにかやっている。どうか、というかそれを当たり前として生きている。

やっていけないのは、欲望におぼれた権力者と、それにこき使われて右往左往させられるかわいそうな人たちと、それから知的好奇心

にあふれた研究者。

フェルは、その二番目と三番目に該当する立場にいる。

リア・ファルではおそらくトップかそれに準ずるぐらいの頭脳でも、現代の日本で言えば小中学生の理科ぐらいのもの。

あたしは夜間の副業として、フェルに理科全般を教えているというわけだ。

「だから、前に進む波も、時間による上下変動も、どっちも図にしたら同じでしょ？でも意味するところは全然違うんだから、重ね合わせても干渉波にはならないし、定常波のグラフは描けないよってこと」

「あー…ほんとですね」

「今までと違って、考えることがひとつ余分に増えたから、簡単ではなくなるんだけどね」

高校物理、しかも平面と時間軸の3次元を取り扱わないといけない分野で、脱落者が少なからずいたことが懐かしい。

回想に浸りかけるあたしの横では、フェルが魔法で小さな箱を作ってそれに見とれていた。手のひらサイズの小さな直方体に、波が左から右へ進んで行ったり、止まったりしている。制御しているのはもちろんフェルだ。あたしに魔法は使えない。

「……便利よね、それ」

「はい？」

「いーえ、なんでもない」

「そっか、僕ここを完全に勘違いしてたんですね？通りで、計算が合わないと思いました」

彼は動く波の模型を魔法で作って（しかも即興で）、さっきしたばかりの解説の意味を実地で理解していた。

フェルは、飲み込みがすごく早い。教えすぎないように気をつけてるつもりなんだけど、たまに逸脱しそうになる。

早い話、教えてるこつちが楽しい。さくさく話が進んでくれるし、もつと知りたい、という好奇心が旺盛。

「魔法がある世界とない世界とでは事情が違うんだから、同じようには考えない、決して教えすぎない」って副業をはじめるときに固く決めたんだけど。決意が揺らぎそうで、困るなあ。嬉しいような、悔しいような、複雑な悲鳴を上げなくなるよ、ときどき。

勉強がきりのいいところまで行ったら、あとは雑談。っていうか、あたしの仕事の愚痴を聞いてもらうのが半分、興味本位で魔法のことを聞いてみるのがあと半分かな。フェルにしたら意味不明なことばかりだろうに、嫌な顔ひとつ見せたことがない。にこにこしながら聞いてくれるんだよ、いい子だよ、ほんと。

「でねー、ほんとに忙しいのに、そういうときに限って雑談振ってくるの。お前に足りないのはデリカシーもか！ってイライラしたよー。足りないのはせめて髪の毛だけでいいのにねえ」

「それは疲れたでしょう眞乃さん…。ああ、こちらの世界でもなくなる人、いるんですねえ」

フェルは、やさしい。

アラサーと呼ばれる年域に突入したとまだ認めたくない、微妙な年頃の女子の愚痴をうまいこと聞き流して、それでも欲しいところにきちんとコメントを、ねぎらいの言葉をくれる。

「いるよーたくさん。なくなる場所はまちまちだけど」

フェルはやさしいから『何が』とは言わない。王宮勤めしてるせいかな、上手くオブラートに包むよね。勉強になります。この場に気を使うべき人なんていないけど、折角だから乗っておこう。

「そうですか。世界は違えどひとに変わりはないものですからねえ。こちらの技術で、何とかなったりはしないんですか？」

「うーん……なったら、すごいだろうねえ。世界中から反響が来そうだわ」

次元の違うお金持ちになれそうなのは確かだろうね。研究が進められているとはいえ、速攻性のあるものが開発されたとは聞かないし。「なるほど、難しいものですね。だとしたら、僕らの世界ではまだまだでしょうねえ」

「フェル、魔法とか錬金術とかではどうにかならないもの？」

「なりませんよ。なっただとして一時的なもので、人体には定着しませんからね。短時間ごまかすことは可能ですが……そんな魔法を毎日かけ直せるのは王族ぐらいのものですし、それで宮廷魔術師の力が尽きてしまつては元も子もありません」

あちらの世界で、すべての人が魔法や錬金術を使えるわけじゃない。当然、術師たちはあちこちの国の庇護のもと、いざというときの戦力として生きている。たしかに、王族のわがままで消耗させてたら自分の国が減びるよね。

「それもそっか。勝手に育ってくれなきゃお手上げだもんね。あ、魔法でそれこそ木とか草でも生やしたら？」

「ダメですよ！冬寒そうですから！」

寒そうと聞いて、つい、冬枯れした草木や葉の落ちた枝を想像して、あたしは盛大に爆笑した。だって、それじゃ余計にさびしいじゃないの。ちなみに言つた本人は大まじめだからね。フェルは、おかしい。

夜が明けるころ、フェルはあちらの世界に帰っていく。転移の魔法の効力をためるのに、ちょうどよいころ合いなんだそうだ。

「それじゃあ、眞乃さん。また金曜日」

「うん。またね」

にこにこ笑って手を振つた、そのフェルの右手から光があふれてあふれて人影が見えなくなつて——光と一緒に、フェルも姿を消した。リア・ファルに戻つたんだろう。

窓から朝日が差し込んでいた。それをカーテンで遮って、あたしは土曜日なのをいいことに爆睡することにした。いつものように。

第二話 理科の戦略的利用法

晩御飯を食べていたら、テレビと本棚の間が鈍く光り始めた。時計を見ると、9時半。いつもながら時間きっちりだ。

「こんばんは、フェル。いらっしゃーい。ちょっと待ってて、ごはん食べちゃうね」

「お邪魔します。お夕食ですか？待ちますから、ゆっくり召しあがってください」

ふわっと広がる光に向かって声をかけると、中から返事があつた。鶏の照り焼きを口に放り込むほどの短い間に光は鎮まってなくなつて、そして光の消えた場所にフェルが現れた。ここにはないどこかの世界、リア・ファルからの週に一度のお客様だ。

今日のフェルのいでたちは、衿や袖口などポイントに白を効かせた濃紺のチュニツク、チャコールグレイのズボンの組み合わせ。なんだか制服みたいで、三割増しとはいかなくても一〇二割増しぐらいにはかつこよく見える。うん、相変わらず目の保養だ。

現れたフェルは礼儀正しくお辞儀をして、やがて食卓を見て、美味しそう、と目を細めた。

「いい匂いがしますね」

「そう？ありがとー」

手早い・楽・安いと三拍子揃った家庭料理全開の味だけだね。料理って試行錯誤で上手くなっていけるから、理科の実験と似通つててかなり好き。

「今度早めに来られるなら何か作るよー？口に合うかわかんないけど」

気分でだしつゆの素・鶏がらスープ・コンソメを使い分けるからな、あたし。来週の金曜日に王道な和食を作ってる保証はないんだけど。青菜の炒め物をお味噌汁でかき込んで、ぱぱっと洗い物を済ませると、フェルは机の上に勉強道具を並べるところだった。

「いいんですか？ 眞乃さんの手料理、楽しみにしておきますよ」

じゃあ今日はその前に、賄賂を渡しておかないといけませんね。冗談混じりにフェルが差しだしたのは、素朴な見た目と裏腹に手間暇のかかる、パウンドケーキみたいな外観の焼き菓子だった。

「ユーファミアから預かってきました。眞乃さんに、おみやげです」
「まじでー？！ユーファのお菓子、絶品だから大好き！お茶淹れるから待っててね！」

ユーファミアはリア・ファル王宮の女官長。母親と同世代ぐらいの年齢に、厳めしい顔付きをしてるけど、なかなかどうしていい人だ。何度か話すうちに仲よくなって、ちよくちよくこうしてお菓子を作ってくれるぐらいにはあたしのことを気にかけてくれている。またそのお菓子が、美味しいんだ。料理長の作る繊細なスイーツとはまた違う魅力があつて、食べててほっこり和む味。今度作り方教えてもらおうつと。

今日は食い気全開みたいだけど気にしません。食は人間がどこでも生きていける最大の活力ですよ！ごはんがおいしければ、元氣が出るものです。その逆もしかり。これ、持論ね。

というわけで、おみやげのケーキでお茶しながらお勉強。真夜中だけど、今日はいいのさ。

「で、おなじ周期の波が揃えて重なると、周期そのままで振幅が倍の強い波になるわけ。この波の面白いところは、時間を変えてみて行くと……」

「あ、あれ？波が動かなくなりましたね」

「そうそう、波が前進せずその場で上下するだけに見えるから、定常波って言つのね」

今日は先週の続き、物理のお勉強。波動の干渉、というやつだ。

ふたつの波が上手く重なることで、強めあう部分と、弱め合う部分ができる。強めあうと波の揺れは倍になるし、打ち消し合って波が消えてしまう部分もある。

スピーカー二台を置いて音楽を流すと、音が大きく聞こえる場所と、小さく聞こえる場所があるよね？あれと同じ理論かな。ほかにも、水面に二つの石を同時にぼちゃって落とすと、波紋が広がって不思議な模様ができたりする、その模様のできかたも同じ理論だったりする。

もちろん波を重ねて増幅するだけじゃなくて、作り出した波を敢えてぶつけて雑音を消す…という手法が、ヘッドホンなどのノイズキャンセリングに使われていたりするから面白い。

「1の力で、2の力の波を起こせるんですね……」

「そうそう。場所によっては0にもなるし」

「これ、魔法にも応用が効きますよね？」

そうかも。魔法の使い方とかその有効範囲とか、属性とか全くわからないけど。たとえ二人がかりでも、半分の労力で、ピンポイントで倍のダメージを与える…っていうのは不可能じゃないはずだ。

「うん、うまく使えばできると思うよ。熟練っていうか、息の合った魔法操作は必要かもだけど」

「なるほど、ためになります」

重ねれば重ねるほど威力は増すはずだけど、息を合わせるのも難しい。2〜3人が限界じゃないかな。

大きくうなずくフェルは真剣な顔をしている。

「こういうの、役に立つ？」

波の干渉って実生活あらゆるところに現れるし面白いよなあ、って思ってた話をしていたつもりなんだけど。フェルの感じ方はまた違いたみたい。

「立ちますよ、もちろん。いかに精神力をすり減らさず、大きな効力を発揮させるか……というのは、私たち魔法使いにとっては死活

問題ですから」

「ふうん……そういうもの？」

「武闘派魔法使いも中にはいますよ。そういう人は、敵に接近されたとして直接攻撃で反撃できますけど、私たちの多くは、戦力に近接されれば圧倒的に不利になりますからね」

まあ、それもそっか。ゲームしてても、前衛で動かすのはだいたい戦士系で、魔法系のキャラは後衛でダメージ少なく戦ってもらうのがセオリーだし。楯の役割を期待するのは酷つてもものかもしれない。「そもそも、遠くから魔法で大きな効力を発揮できれば、相手方の魔法使いに大して大きな圧力になりますから。倍の力を持つ魔法使いが敵方にいる……と思わせるだけで、避けられる争いもあるでしょう。もちろん、こけおどしなので、そうそう多くは使えませんが」

戦略的というか軍事的というか、そういう利用方法の話を聞くと、あらためてあたしたちは平和ボケしてるんだなーって思う。技術は美味しく便利に使うもので、それ反則じゃん、完全にチートだよ……って言われないように、上手く付き合っていくべきものだと、平和な世に生きる（少なくとも）あたしは思っている。

それでも、こうやって話す知り合いの国が何かしらの脅威に晒されていて、それを退けるために技術を欲していると考えると、こんなのはほんとした思考でいいのかなあ……とちよっと思ったりもする。「……そっかあ。リア・ファルもやっぱりそういう、軍を出して争うようなことに巻き込まれたりするもの？」

「それは、国はひとつではありませんから」

どうやら、国境が存在する以上、避けられないものらしい。ただ、とフェルは表情を和らげて補足をしてくれた。

「とはいえ、ここ数十年ほどは大きな戦いはないですね。大陸で覇権を握っているのは隣国で、それも宗教国家なので攻め入られることはまずないでしょう」

宗教にもいろいろあるけど、とりあえず争いを厭う方の宗教っぽい

な。なるほど。

「戦力よりは、外交っていうか精神面で攻めてきそうだよな」

うちの国を攻めると天国に行けませんよー！的な感じで。基本的だけど効力は大きいだろうな。科学技術の発達してない世界なら尚のことだ。

「ああ、そういうことはまああるですよ。敬虔なそちらのお国には敵いませんけど……って持ち上げつつ距離をおいておけば、特に弊害はないですかね、今のところ。宗教国家のさらに向こうに位置する国はちよつとややこしいので、できれば境界を接したくはありませんけどね」

あるんだ。ちよつとおかしい。

そしていつになく毒をぶつちやけるフェルもちよつとおもしろい。外交ルートでいろいろ苦労させられてるのかなあ。

「ふーん。っていうか、こういうことあたしに言っちゃっていいの？」

もろに機密の二オイがするんですけど。

なんとなく心配で言ったら、一笑に付された。

「それはそうですけど、眞乃さんから一体誰に漏れるんですか？それはそうだ。」

「えー……どこかの国の間者？」

「間者が侵入した時点で外に叩きだすでしょう、眞乃さんなら」

悪ノリして冗談を言ったら、忘れたい過去を掘り起こされて逆襲された。ぎゃふん。

まさに「叩き出し」を実行した身としては苦笑するしかない。しかも——実行した相手はリア・ファルの馬鹿王子ときてる。

「えーと、わ、忘れてください」

「いえいえ、伝説のひとつとしてリア・ファル王宮に語り継ぎますとも」

やーめーてー。そんな変な経歴で名を馳せたくないよー。

きつとそれは気の合わないこと極まりない馬鹿王子も同じだろう。

「あ、あれ…まだ怒ってそう？」

怒っているか、の主語はもちろん某王子だ。こわごわ聞いたところ、フェルは思い出し笑いをこらえきれない顔になった。

「でもないですよ！。断りもなく女性の部屋を訪れるとは何事か！
って王妃様と女官長にダブルでこってり絞られて、『あれは藪蛇だった……』って柄にもなく反省してらっしゃいました」

柄にもなく、って言うフェルもすごいけど。まあ国ではひとかどの地位にいるしいいのかな。（いいのか）

叩き出したのはスカツとしたけど、あれはあれで回収が大変だったから、できればもうしてほしくないし。反省してるならいいか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4777r/>

いつか同じ空の下

2011年4月3日11時13分発行